

正史の女性

与謝野 晶子

歌に生き恋に生き

福地 重孝



晶子と鉄幹

1932年（昭和7）の上海事変のとき、日本軍にとって最も苦しい戦の一つに廟行鎮の攻撃戦があった。中国軍は深さ4mにわたる鉄条網をはりめぐらして、わが軍の前進をはばんでいた。その鉄条網を破壊して突破前進するために、久留米の工兵隊が、爆薬筒をだいて伍体もろとも鉄条網めがけてとびこみ、進軍の突破口をひらいた。作江、北川、江下の三勇士が誉たかき「肉弾三勇士」として、その壮烈な行為が忠勇美談として銃後につたえられた。新聞社は、「肉弾三勇士」を讃えるための懸賞歌を募集し、それに当選したのが、與謝野晶子の夫、与謝野鉄幹（寛）であった。文句は忘れてしまったが、力強い荘重な歌詞で国民の志気を鼓舞したことを思い出す。それは虎の鉄幹晩年のことであり、日本軍国主義の高揚期のことであった。

こんなことを冒頭に書いたのは、彼の妻、晶子が、日露戦争のとき、旅順口包囲戦にある弟の鐵三郎を欺

いて「ああおとうとよ、君を泣く、君死にたまうことなかれ」と、一詩をうたひ、当時問題になった。この二つの記憶が重なりあって筆者の頭に浮んでくるからである。

鉄幹と晶子は、明治歌壇の巨星として「明星派」に君臨し、夫鉄幹は63歳で昭和10年に没し、晶子はそれにおくること7年65歳でその生涯を終った。鉄幹は晶子の才能を見出し晶子は鉄幹によってその才能を近代歌壇に開花させられたのであった。「おしどり歌人」である。鉄幹の若い時代の歌集に「人を恋ふる歌」というのがあり、「妻をめとらば才たけて、顔うるはしくなさけある」とよんだそれが現実の妻晶子であった。又歌集「紫」の中で「われ男の子、意気の子、名の子、つるぎの子、詩の子、恋の子、ああもだえの子」とうたわせたのが、彼の妻の晶子であった。

与謝野晶子（1878～1942）は明治11年12月7日、堺市甲斐町の菓子舗駿河屋の屋号をなめる鳳宗七の三女に生れた。母はつね。てる、はなどいう二人の異腹の姉があった。駿河

屋は堺の老舗であり格式を持つ商人であったから、娘の教育は厳格におこなわれた。7歳で宿院小学校に入り、9歳で漢学塾に学び、小学校を卒業すると堺女学校に入学、15歳で卒業すると補習科に学び、古典を主として学んだ。19歳のとき、「堺敷島会歌集」第3集に短歌一首を投稿しその新入会員となっているから、短歌への関心は20歳近くになったころからであろう。晶子自身も「私は20歳まで歌をよもうとしなかった。10歳位の時から歴史・文学の類の書物を家庭でひそかによむうち、俳句や歌の類にもふれてよんだ。明治30年ごろ、鉄幹の歌が読売新聞にのっているのをよんで、家庭の陰鬱な空気から逃れるために『新詩社』へ歌を送った」といっている。

鉄幹を慕って

当時、青年詩人鉄幹は、革新的な「新詩社」を創立し、機関誌「明星」を発行していた。丈夫ぶりの歌によって「虎の鉄幹」とはよばれ、これまでの文人墨客の花鳥風月に厭しきマナーリズムを排し、修飾にと

らわれず、無造作に卒直に詠ずるこそ新しい歌の道であることを主張していた。

晶子はそれならば自分にもよめると思い、自分の気持のうさをはらすつもりで投稿すると、鉄幹は彼女の詠草をはめてくれた。「もし、そのとき貶されていたら気のよわい私は一生それきりで歌をよまなかったかも知れません」といっている。

「師と呼ぶをゆるし給へな紅させる口にていかで友といわれん」。明治33年8月、鉄幹が大阪遊歴中に相知り、11月5日友人山川登美子と鳳晶子は、「若き師」鉄幹とうちつれ、京の南禅寺永観堂で紅葉見物をし、夕食を共にしてから、彼女は鉄幹に妻子のあることを知りつつ友人山川登美子が結婚して鉄幹のもとをとのおくと、晶子の鉄幹をしたう心は烈烈な心となって彼に傾斜していった。翌年3月には、晶子は鉄幹と丸山の華頂山鉱泉に一夜をともにするようになった。

「その子^{はた}二十櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな。」

と、人間を肯定し、成熟した女性美を高らかに誇示する彼女。さらに「やは肌のあつき血潮にふれも見でさびしからずや道をとく君」の歌の進境は、鉄幹の妻滝野への挑戦となったのであった。晶子は6月大阪を単身出奔し、東京郊外の渋谷の奥まで鉄幹を求めてたどりついた。滝野と晶子、このはげしい争いのあと、滝野は子供をつれて徳山の実家に帰った。明治34年8月、木村鷹太郎の媒介で晶子と鉄幹は結婚したが、晶子にとっては「死」を決しての鉄幹への執心は滝野からの略奪に成功したのであった。

豊かな才能の開花

その歌集「みだれ髪」は恋愛詩集

といわれ、反明星派からは淫蕩文学の如く非難されたが、生来の女性としての晶子は、慎ましく淑やかな、純潔を尊ぶ旧家にそだち、女性であった。それが人目を憚らないで天衣無縫の才能を発揮して、日本における明治女性の純粹無垢の青春の詩歌となったのであった。旧道徳にはばからず、青春の感覚とそのよこびを、自由奔放に文学的勇氣を以て歌ったのであった。本能主義、感情主義の制約はあったが、旧道徳を否定して恋愛を明い美しいものと肯定し、人間性の尊重をうたいあげたのであった。彼女の歌調は、夫鉄幹によって啓発され、これまで罪惡視した恋愛を、美しきもの、至上のものとして、封建的な因襲と古いモラルから解放し、短歌の近代化に重要な位置を占めるに至ったのである。

明治37年9月号の「明星」に「君死にたまふことなかれ」の五連の詩がのった。大町桂月は国家観念をないがしろにした危険なる思想として乱臣なり賊子なりと、これを憤慨非難したが、良心の叫びも、真実の声も熱狂的な軍国調にかき消されてしまったとき、この詩を書いた晶子は際立った特異の個性ある女性であった。そして明星10月号では、「ひらきぶみ」を誌上にのせ桂月の非難を反ばくしている。もちろん当時の晶子には今日いうところの戦争批判や反戦意識を以てうたったのではない。これは人間の自然の感情をいつわりなくうたったために、今日でも鮮やかに人々の心をうつのであろう。

妻として母として歌人として

鉄幹にとっては、女弟子であり、愛妻であった晶子が、明星を代表するまでの成長を示し夫の名声をしのぐまでに至った。この間晶子は、詩に評論に短歌に多くの作品を生産し

ながら、一方では妻としての煩忙にたえ、また母性として、5男6女の母となった。明治31年11月長男光(医博)を生みついで次男秀(37, 7外交官)、40年には双生児長女八峰次女七瀬、三女佐保子、(43, 2)、四女宇智子(44, 2)四男アウギウスト(大正2)、五女エレンス(大正4)五男健(大5)を生んだ。大正6年10月男子を生み、生後2日で死亡、次いで六女藤子(大8)をうみ、妊娠と出産の女性の重荷を果している。ちなみに長男の名付親は上田敏、次男は薄田泣薫、長女、次女は森鷗外であり四男のアウギウストはパリにある時に生れたものでロダンが名付親であった。

青春時代に浪漫的な官能的詩歌をよんだ彼女の歌風は、反明星派の尾上柴舟や、金子薫園や、自然主義の若山牧水や前田夕暮らにも少なからずその影響を与えているといわれている。輝かしい歴史を持った明星もやがて散文学の発展で、その魅力をうせ、明治41年11月に百号を以て廃刊となるが、晶子の評論家としての活躍は「青踏」出現前後にも著しいものがあつた。

大正10年文化学院の創立に際し、その学賢となったことは、彼女の現実性と社会性を示す一証左とみてよくさらに大正デモクラシーの時期を経て婦人選挙権獲得運動がさかんになってきたとき、「同じく人なるわれら女性、今こそ新たに試す力、いざいざ一つの生くる権利、政治の基礎にも強くたたん。われらは堅実、正し清し、女性の愛をば国に拡む、人たるすべての義務を担い賢き世の母姉たらんと、「婦選の歌」をつくり文学の世界より、政治の世界へその視野が拡められていった。

〔筆者は和洋女子大教授文壇〕